乾 愛有美

本研究は、4·5 歳齢保育園児の共同意図の無い相手を「手伝わずに見守る」行為について検討した。 人は互いに助け合って生きているが、日常場面では、困窮状態にあっても必ずしも周りからの協力行動 を必要としておらず、一人で解決したいと懸命に取り組んでいることもある。そのような状況では「あえて手 出ししない」ことが重要となる。本研究では、4·5 歳齢保育園児は、友達が困っているが「一人でやりきりた い」と思っている場面において、相手の意図を汲み取ったうえで、協力行動を控え見守ることができるの かどうかを調べた。また、「手伝わずに見守る」ことができることと、社会的能力や社会ネットワークに関連 があるのかも調べた。

大阪市内の保育園の年中クラスに所属する36名(男児24名、女児12名、平均月齢61.39ヵ月)の協力児に対して、「手伝わずに見守る」ことができるかどうかを調べるための協力課題を行った。その結果、相手の「一人で作りたい」という欲求が明示されていたとしても、あえて「手伝わずに見守る」ことができる児は、ごくわずかであった。年長児を対象とした先行研究との比較から、困っている相手に手出しせずあえて「見守る」行為は、5歳頃から発達し始める可能性が示唆された。

協力課題における児の行動選択に影響する要因として、心の理論、葛藤抑制、言語能力を仮定し、それぞれを測る課題として理由づけを含む誤信念課題、DCCS 課題、絵画語い発達検査を実施した。分析の結果、何か考えを持って行動を選択したと考えられる児に限ると、「一人で作りたい」という相手の欲求が明らかな場合に「見守る」児は、「手伝う」児よりも、相手の心的状態を推測する能力が高く、本来やりがちな優位な行為を抑えて優位でないが適切な行為を行え、さらに語いの理解力が高いことが示された。しかし、心の理論、葛藤抑制、言語能力のうちのいずれの要因も、協力課題における児の行動選択の予測に役立つものではなく、「手伝わずに見守る」行為と社会的能力の間に明確な関連は見出されなかった。

「手伝わずに見守る」行為が、近接関係のネットワークにおいて中心的な役割を果たすかどうかに影響するのかも検討した。自由遊び場面におけるスキャンサンプリングによって得られたデータから、協力児の近接関係のネットワークにおける中心性の指標を算出した。分析の結果、「手伝わずに見守る」行為ができるからといって、中心性が高くなる訳でも低くなる訳でもないことが明らかになった。

協力課題においては、児に行動選択の理由を尋ねた。その結果と先行研究の結果から、相手の意図を考慮したうえで適切な行動を選択し、その理由まで説明できるようになる前に、直感的な理解により適切な行動の選択はできるが、その理由を言語的に説明できない段階がある可能性が示唆された。

先行研究の結果も併せて考えると、一人で頑張っている相手を援助することが余計なおせっかいになってしまう可能性は心の理論の獲得とともに理解できるようになるが、それだけでは「手伝わずに見守る」 行為ができるようにはならず、さらに別の能力の発達が必要である可能性が示唆された。そこで必要な能力とは、本研究で検討した葛藤抑制と同じく抑制機能のひとつであり、優位なある反応を抑える遅延抑制の能力である可能性が示唆された。(比較発達心理学)